事例 2

越境と更新を繰り返すアーティスト・表現としてのコーディネート

調査対象

【コーディネーター】

アサダワタル（文化活動家／社会福祉法人愛成会品川地域連携推進室 コミュニティアートディレクター、アーティスト、文筆家）

事例調査から見えてきたポイント

◎ 日常に寄り添い、プロセスを重視し、時間をかける

- 単発のイベントとしてインパクトを出すよりも、プロセスを重視することで、地域の生活に寄り添うことができる。
- トークや熟議の時間をたっぷり取ることで、他者の思想や経験、立場等の差異をこえて共に在ることができる豊かなパブリックの場が立ち上がり、「文化的コモンズ」の形成につながる。
- コロナ禍による議論の場のオンライン化で、無駄話や熟議の機会が減少している。今後は、あえて無駄話をする機会をつくることもアートコーディネーターに求められるのではないか。

◎ コーディネーターには、分野横断できる「通訳者」としての役割が求められる

- 行政と現場のより良い関係、あるいは他の領域との連携を進めるときの媒介役となるコーディネーターの位置づけが重要だろう。その時に、コーディネーターには双方の考えを「通訳」できることが求められる。
- コーディネーターが「通訳者」として他分野の専門家と協働することで、地域における文化拠点の存在意義を広げていくことにつながる。

◎ 生活と地続きの施設として、地域の話を聞くために、相談を事業化する

- 市民の聞き手となり、熟議につなげる受け皿として、相談事業の展開が効果的なのではないか。
- 文化の相談と言っても、人によっては人生相談につながることもあり、それほどライトではない。
- 福祉におけるコーディネーターは相談支援専門員として活動しているが、文化分野の相談を設計するときにも福祉の事例は大いに参考になる。

◎ 文化施設の業務にコーディネーター的な仕事を位置づける

- コーディネーターを持続的な役割として組織の中に位置づけるためには制度化が必要であり、福祉分野の相談支援専門員が長期間にわたって生活レベルの並走を続ける仕組みや、地域ケア会議での異分野と連携するプラットフォームづくり等が参考になる。

◎ プロセスを重視した取り組みをいかに評価していくかは課題

- 文化施設においては、集客数などのアウトプットで事業を評価することが多いが、社会共生などを意図したプログラムを実施する際、事業のプロセスにおいてどのようなやりとりや交流があったかを俯瞰した上で、相応しい評価ポイントを見極める指標が求められる。

*1：2012 年 10 月～2013 年 3 月にかけて、TOYOTA「子どもとアーティストの出会い」の一環で実施された音楽ワークショップ事業。高知県四万十市西土佐小学校の生徒と、保護者や地域の大人の記憶に残る楽曲をリサーチし、それをコピーバンドのコンサートという形で発表した。

*2：東京都足立区千住地域を舞台に、2016 年から 2020 年末まで「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」の中で実施していたプログラム。「タウンレコーダー」と呼ばれる市民チームと、まちの音を素材にオリジナルサウンドメディア『音盤千住』を制作したり、イベントを開催した。

*3：2016 年からアーツカウンシル東京の「Art Support Tohoku-Tokyo」の一環で福島県の復興団地を対象に行われているアートプロジェクト。住民のメモリーソングやリクエストソングをもとにオリジナルのラジオ CD を制作し、配布する。

*4：2006 年から 2009 年まで應典院が大阪市の事業を受託し実施していた事業。アサダさんはディレクターを務めていた。詳細は後述。

- 社会的な要請があって行う社会共生や社会包摂事業に対する評価軸は、文化芸術のアウトプットで規定されているものに限らないところまで掘り下げてつくる必要がある。

---

1. コーディネーターとしての仕事や活動の内容

アサダさんは、音楽家としての活動と並行して全国各地でアートプロジェクトやワークショップを展開しており、「表現による謎の世直し」をテーマにしたその活動は多岐にわたる。その実践は（1）表現者としてのアートプロジェクトの演出、(2) 障がい・福祉の現場におけるコーディネート、(3) 執筆活動による経験の共有の 3 つに大別できる。

(1) 表現者としてのアートプロジェクトの演出

アサダさんは、アートプロジェクトやワークショップの内容や構成を考えることを「演出」と呼び、アーティストの「表現」としてアートプロジェクトに取り組むことで、コーディネーションの場をつくっている。

例えば、音楽をベースにした実践として、2012 年の「コピーバンド・プレゼントバンド」(*1) では高知県の小学生とともに、2016 年の「千住タウンレーベル」(*2) や「ラジオ下神白」(*3) では地域住民とともに、参加者の記憶とリンクする音楽を深堀りして発表することを演出し、演奏や作曲だけではない音楽への新しい参加方法を提示している。

【インタビュー調査の発言から】

- 演奏することや、何か作品を生み出すというような感覚から、日常のいろいろな出来事を企画・演出することが自分にとって表現になるのだと思った。その時に、コーディネーターのような立場とアーティストのような立場が混ざってきた。
- ワークショップやプロジェクトにおけるプロセスを大事にすることと、自分が音楽をやってきたこととをつなぐことが、30歳を超えてからやっとできるようになった。

(2) 障がい・福祉の現場におけるコーディネート～ひとりの支援者として

アサダさんは、表現者としてアートプロジェクトに取り組むことと地続きの活動として、福祉分野、特に障がい者福祉の分野でもさまざまな取り組みを行っている。この分野においてはホームヘルパー２級の資格を取得し、福祉現場で働いた経験もあり、アートと福祉双方の視点から、さまざまな福祉現場でのワークショップのコーディネートを行っている。

【インタビュー調査の発言から】

- アートリソースセンター by Outenin（築港 ARC）(*4) の仕事をしている時にヘルパーの資格を取りにいって、週一回、介護の仕事をしていた。
- そこに着目をしてくれたのが滋賀県社会福祉事業団（現・社会福祉法人グロー）(*5) で、そこが運営するボーダレス・アートミュージアム NO-MA で、「障がい×アート」ということに取り組み始めた。
- 幾つかの団体からワークショップのオファーがあり、横浜の「カプカプ」(*6) という所では、4 年ぐらい定期的にワークショップを行っている。また「ハーモニー」(*7) さんにも月に2回通ってみなさんと一緒に作品をつくっている。

*5：前身となる滋賀県社会福祉事業団の頃から障がい者支援に取り組み、現在では近江八幡市の「ボーダレス・アートミュージアム NO-MA」の運営等で知られる。

*6：神奈川県横浜市の団地の一角にある地域作業所で、喫茶を併設している。

*7：東京都世田谷区にある精神障がいを持つ人のための作業所。

*8：2019 年 10 月に開所。指定管理を請け負う愛成会の誘いでアサダさんは立ち上げから参加している。

*9：2012 年 1 月に刊行した自身初の単著。2020 年 3 月には大幅な加筆修正を加えた文庫版『増補版　住み開き』を発表している。

*10：『想起の音楽』　2016 年に滋賀県立大学に提出した博士論文をベースに書籍化したもの。自身の実践に音楽とコミュニティの接点を見出し、その繋ぎ方と受け取り方とをまとめている。2018 年に水曜社から刊行。

*11：ココルーム　正式名称「こえとことばとこころの部屋」。

- 現場に一番関わっているのが「品川区立障害者総合支援施設ぐるっぽ」（*8）。仕事はディレクターなので部下もいて、2019年度、20年度の2年間は非常勤雇用で入っている（21年度は請負契約で継続）。福祉の事業は相談支援や成人の生活支援、児童の支援など幾つかに分かれていて、私は成人支援部門を担当している。雇用元は施設の指定管理者の愛成会という法人。

(3) 執筆活動による経験の共有

アサダさんは、現場で経験したことを執筆活動として整理することで活動全体を前に進めてきた。それは、「表現」の持つ可能性を社会に対して示していくことでもある。

文化施設・機関においても、現場の様子や業務から得られた気づきをなど文章にまとめて経験を施設内外に共有していくことが、スタッフや市民の思考を深めたり、次なる活動のヒントとなったりしていると考えられる。

【インタビュー調査の発言から】

- 自分は書くことによって仕事というか、全体を前に進めてきたところがある。その最初のきっかけは住み開きアートプロジェクト（詳細は後述）をやった時に、たまたま出たトークイベントに来ていた出版社の方から「これは面白いから本にしないか」と言われたこと。（*9）
- 現場では、アートに興味を持ってくれる人たちとの出会いはあるが、その枠を超えて社会というかコミュニティのことについて、表現でこういうことを考えられたらいいなというので書いていった。
- 自分がやってきた音楽とコミュニティについてはきちんと自分なりに深めて書きたいと思って、大学院に行って研究した。（*10）

2. コーディネーターとして活動するようになった経緯

(1) 社会と表現をむすぶレッスン期～大阪・ココルーム（*11）時代

アサダさんは大阪市立大学卒業後、バンドマンとして活動しながらアルバイト生活を送っていた。また、「大和川レコード」（*12）という名義でソロ活動もしていて、フィールドレコーディングを中心とした音源を制作したり、ライブパフォーマンスを行ったりしていた。その頃、出入りしていた場所の一つでチラシを見かけたことをきっかけに、ココルームでのライブに出演することになった。ココルームには「どうやって自分の表現を社会化していくか」に悩む多様なバックグラウンドを持つメンバーが集っており、アサダさんはそこでボランティアとして仕事をするようになった。翌年（2004 年）にはフルタイムのスタッフとなり、西成地区の人々とパフォーマンスや朗読などの発表の場所づくりに奔走した。

ココルームでは、野宿経験者や障がいのある方など「今までに出会ったことがないいろいろな人たち」と創作活動を行った。社会的なこととの関わりで表現が生まれる実感を持ちながらも、自分の表現としてうまく消化しきれないことに息が詰まるようになり退職したが、アーティストとしてはその後もココルームと関わり続けている。

【インタビュー調査の発言から】

- 音楽をやっていてもライブハウスなどの枠に収まることに違和感があった。自分がやる表現にフィットする場所はどこなのかと求めていく流れで、オーガナイザーや、スペースを運営している店長という方々にまず注目した。その方々が「どういうふうに生きているのか」というところに関心を持ち始めた。

詩人の上田假奈代氏が主宰し、釜ヶ崎の住民が出入りするスペースとなっている。

*12：大和川レコード　アサダさんのソロ活動時の名義。大学近くに大和川が流れていて、その近くで弾き語りやフィールドレコーディングをして遊んでいたことにちなむ。

*13：詩人、NPO 法人「こえとことばとこころの部屋」（ココルーム）代表。2014 年度芸術選奨芸術振興部門新人賞受賞。アーツカウンシル堺プログラム・ディレクター

*14：208 南森町　編集者・岩淵拓郎ほかとともに運営していたマンションの一室。ゲストを呼び、トークやライブを不定期で開催し、一般公開していたのが「住み開き」の原点となっている。

*15：應典院　大阪府大阪市にある浄土宗の寺院。NPO「應典院寺町倶楽部」を中心とした市民に開かれた活動で知られている。

*16：pia NPO　大阪府大阪市港区築港にあるビルで、NPO が多数入居していた。駅の反対側には海遊館などのレジャー施設がある。

- 最初は自分の中でも、自分たちで何をやっているのかが理解できなかった。おそらくココルーム主宰の上田假奈代（*13）さんも理解していなかったのではないかと思う。何か先に手が動いてしまう感じというか。今思えば、それはもちろんアートプロジェクトといってもよかったかもしれない。
- 表現のパートナーやフィールドが、変わらざるを得なくなっていった。その変化と、自分の一表現者という立場の中でも、その変化が表現に入り込むというか、つくっていくものが変わっていってしまった。その時期が自分でも何をやっているのかが一番分からないのと同時に、他人からもそう思われていると感じていた。「今、何かむちゃくちゃ迷走しているよね」という感じだった。

(2) コーディネーターとしての仕事をネットワークづくりからはじめる～築港 ARC

2006 年 3 月のココルーム退職後、映像制作会社の仕事をしたり、友人たちの運営する 208 南森町（*14）のメンバーに参加したりしながら、應典院（*15）の秋田光彦住職から、應典院が受託した大阪市の芸術系 NPO 支援育成事業のディレクターの打診を受ける。仕事は、2009 年度までの約 4 年間の事業で、pia NPO（*16）という建物の一室を使って•アートリソースセンター by Outenin（築港 ARC）という場を構え、中間支援を行うというものだった。

應典院からは、ディレクションのすべてを任され、当時 27 歳だったアサダさんは、これまでに形成したネットワークやココルームでの経験を活かして、４人のスタッフとともに、外部のヒアリングに出かけながら、築港 ARC のフレームを完成させた。具体的には新たに現場を立ち上げようとする人たちの後方支援、ボランティアのコーディネート、ネットワーキングなどの企画で、その核となっていたのが、毎月開催していたトークイベント「ARC トークコンピレーション」である。

このトークイベントでは、小学校の先生、福祉関係者や医療スタッフ、環境系 NPO の職員、アーティストなど、ジャンルを問わずゲストを呼び、アートが各分野の中でどういう役割を果たせるかをテーマにトークを行った。1 人のコアスタッフとアサダさんがそれぞれ異なる分野にバックグラウンドを持つことで実現できたジャンルの幅は、アサダさん個人にとって「自分自身の表現を越えて」事業のコーディネートを実施する初めての現場となったが、それはいわゆる走りながら考える式でもあったという。

【インタビュー調査の発言から】

- 「『分かりました、やります』と言ってしまったが、全然その専門性がないな」と思いながら、本当は自分がネットワークを持っていて、いろいろつなげていくという役割だとは理解したものの、自分自身がネットワークをつくっていって同時にそれを見せていくというやり方をしないと間に合わなかった。
- 私はどちらかというと音楽や今で言うアートプロジェクトのようなところを受け持ち、他のスタッフは文化政策・演劇・デザインなどそれぞれの相談委員という形で、「このような人を紹介してくれないか」「こういう所でイベントをしたいが、どうやったらいいか」「どういうところで助成金を取ったらいいか」というのを一緒に考えながら相談に乗って、自分たちも力を付けていくような感じでやっていた。
- 多ジャンルの人たちと表現について語り、各分野の中でアートがどういう役割を果たせるかということをテーマにトークした。

(3) コーディネートが表現になる～住み開きアートプロジェクト

築港 ARC の最終年度に行った「住み開きアートプロジェクト」では、家のようなプライベートな空間で集いの場をつくっている人たちを訪ね歩いた。アサダさんは、それぞれの場で熟議や表現をキーワードにプログ

*17：正式名称は八戸ポータルミュージアム。八戸の玄関口として、いう意味があり、八戸の情報を手に入れて、まちなかや観光地に誘う役目を持つ。事業としてアーティスト・イン・レジデンスにも取り組んでいる。

208 南森町での
トークの様子

ラムの仕立てを考えた。それは、「いろいろな人たちをコーディネートしながらその在り方を考える」というコーディネーション自体が、表現や企画・演出になるということをはっきりと自覚したきっかけになったという。

このプログラムの種となっているのは、自分たちの創意工夫でプライベートな空間からパブリックな場をつくっていくことができるという実感を得た「208 南森町」運営の経験である。この時期、アサダさんは、4 つの現場―ココルーム・築港 ARC・應典院・208 南森町―に同時に関わっていて、場づくりで相当鍛えられたと振り返っている。

また、公的資金で運営される空間とプライベートの場を行き来することにより、コーディネートの濃淡のつけ方のバランス感覚も養っていった。

【インタビュー調査の発言から】

- コーディネーション自体が自分の表現やクリエーションになるのだということを実践したのが「住み開きアートプロジェクト」。
- 大阪市が税金を使って行う築港 ARC という事業と、当時、公設置民営型だったココルームと、宗教法人の應典院と、プライベートの208南森町の4つをやっていた時に、お金の感覚も公共の担い方も、そこに出入りする人たちの感覚もおそらく違うのだが、私の中では同時にやっていたのもあって、比較できることがいろいろあった。
- 住み開きアートプロジェクトは、すごくプライベート寄りのこと。しかし、使っているお金は100%税金とアサヒビールさんから。それこそ逆に公的な資金や民間の助成金を使うべきところだと思ってやった。

3. アサダさんのコーディネート業務の特性と成果

アサダさんのコーディネート的な活動を俯瞰すると、次のような点が浮かび上がる、それは、(1) 単発のイベントとしてインパクトを出すよりも、プロセスを重視すること、(2) トークや熟議の時間をたっぷり取ること、(3) 日常的な表現の場をつくり、少しずつ状況を好転させていくこと、(4) 実践の成果や課題を文章として構成しなおして一般に共有していくこと、である。これらに共通しているのは「時間をかける」という態度だといえる。

(1) 単発のイベントとしてインパクトを出すよりも、プロセスを重視する

「住み開き」や福祉施設での取り組み、滞在制作、時間をかけたワークショップを行うことなど、アサダさんの特性の一つとしてプロセスを重視することが挙げられる。

また、障がい者福祉との関わりでは、障がい者施設で文化的な取り組みを行うとき、施設で祭りやイベントをやるというようなレベルから、もっと踏み込み、日常的に個々の表現と関わっていくことで、社会と障がい者の間にあるステレオタイプな関係を越えていこうとする。

【インタビュー調査の発言から】

- （「住み開き」は、）自分にとっては演奏することや、何か作品を生み出すというような感覚から、日常のいろいろな出来事を企画・演出することが自分にとって表現になるのだと思った。（再掲）
- コミュニティに関わる表現者として、最初に「住み開きアートプロジェクト」を見て「来てくれないか」と言われたのが八戸市の「はっち」（*17）だった。オープン前のプレレジデンスという事業で、2カ月ぐらい滞在

*18：地域創造による調査研究報告書で提案された言葉。地域の共同体の誰もが自由に参加できる入会地のような文化的営みを意味する。
「災後における地域の公立文化施設の役割に関する調査研究―文化的コモンズの形成に向けて―」、2012-13 年度

アサダワタル
『住み開き　増補版』
（ちくま文庫）

した。はっちが開設されるまでの間に、近くの空きテナントを活用した展示スペースをつくって、そこで実験するというようなことだった。

- プロジェクト的なワークショップや、プロジェクトのプロセスを大事にすることと、自分が音楽をやってきたことをつなぐことができるようになっていった。

(2) トークや熟議の時間をたっぷり取る

アサダさんは、パブリックとプライベートを行き来してコーディネートすることで、その時々のトピックに多様な角度からアプローチし、その場に居合わせる人々の熟議を生んでいく。必ずしも結論がもたらされるとは限らず、金銭のやりとりが発生するとは限らない時間の中に、他者の思想や経験、立場等の差異をこえて「共に在る」ことを可能とする豊かなパブリックの場が立ち上がっている。これは「文化的コモンズ」(*18) のつくり方を考える上でも、大いに参考にしたい点といえよう。

【インタビュー調査の発言から】

- トークはとにかく長い時間を使うのが大事だと東浩紀さんも言っているが、それには結構賛同する。
- 結局2時間のトークは自己紹介をして、どこでも話しているような話をして終わってしまう。そこからが大事なのになかなかそれができない。「208南森町」はプライベートな場所なので、とにかくゲストも観客もずっとだらだらと話して、みんなが鍋を囲みながら話すことによって生まれる熟議のようなものがすごく面白かった。別に結論が出るわけではない。この感覚というのはやはり、他ではできなかった。

(3) 日常的な表現の場をつくり、少しずつ状況を好転させていくこと

プロセスを重視する姿勢とも重なるが、アサダさん的コーディネートに重要なのは、日常的に表現と接する場を丁寧に設定する点であろう。そこでの振る舞いはアート性を前面に出すのではなく、むしろ「アート的な背景をできるだけ消す」ことにあるという。アートというときに「敷居の高さ」がついて回るというのは文化におけるコーディネートを担う人にとっても共通の悩みであるが、アサダさんの考え方は大いに参考になる。

【インタビュー調査の発言から】

- 福祉施設では利用者さんの個性が出ることや、人となりが現れることと同時に地域ともつながっていくというような、一連の流れをどういうアーティストとなら一緒につくれるかということを、いろいろ考えて進めてきた。
- 自分は設定として結構不思議なことをやっているので、それがアートということだと思うのだが、説明自体が難しい。やりながらだんだん分かってもらうが、それは「利用者さんを参加させてあげている」のではなくて、「一緒に訳の分からないことをやる」という時間を持つこと。それによって、関心のレベルがひとつ違ってくる。
- 文化・芸術をアウトリーチしているというような感覚をあえてなくしてやっていくことによって、結果的にいろいろなコミュニティ活動や社会活動の選択肢を増やしていける。
- 福祉の現場では、人的リソースが少ない中で現場を回しているので、スタッフが気持ちよく対等にやれることが大事だ。過度なアート性を強調するというよりは現場になじんでいく、一緒につくっていくというようなコーディネーションが必要で、自分も「私はアートの立場で来ている」という態度を取らないことを意識してきた。

(4) 実践の成果や課題を文章や放送として構成しなおして一般に共有していく

現場で起こることを重視しつつ、その体験が一部の参加者としか共有されない状況に対して、執筆・出版やポッドキャストなどの手法を用いて、より広く経験を共有していくというのも、アサダさんのコーディネートの特色のひとつである。ただ、メディアで事例が大きく取り上げられた際、誤解も含めて広がっていったことがあるが、それでも事例が社会に広く共有されることを優先し、誤解もある程度許容するというのがアサダさんの考え方である。

公的な文化施設・機関では、事業の報告書を作成しても事例だけが羅列されていて、考察が行われないケースが多いこと、その報告書を読むことができる人が行政や関係者などの一部に限られることが課題であろう。公的資金が投入される施設や事業においては、その成果の共有が求められるが、アサダさんのように出版であれインターネット上のアーカイブであれ、取り組みを言語化し、広く共有していく姿勢は参考にすべき点である。

【インタビュー調査の発言から】

- 毎月のトークはすべてアーカイブした。さらに、毎週このトークの内容を分割・編集して流すネットラジオ(ポッドキャスト)を立ち上げた。リアルな現場でのトークは、20名ぐらいしか入れないので、ネットラジオと組み合わせ、その場で語り合い、そこから生まれるネットワークを基にしていろいろ基盤をつくっていった。
- 「住み開き」についてメディアではアートの活動としてやっているとはことさら書かれないので、「家を開いてコミュニティができる」という見出しでだいたい広まっていく。それに反応する人のほうが、やはり圧倒的に母数は多い。

◎ 成果

文化施設や文化拠点が行う創造的な活動は、集客や話題性など単発的なインパクトで評価されがちだが、アサダさんの活動は、派手な成果は生まれなくても、地域の日常を少しずつ改善するような形で、個人の生活に確実に変化をもたらしている。文化施設という大きな塊に対する評価と合わせて、今後、このような小さな活動に対する眼差しをどのように持っていくのかが問われるべきだろう。

【インタビュー調査の発言から】

- 障がい者に対してどう接していいか分からないことが、「イコール接しないほうがいい」となってしまうことを超えていくために、アートは結構有効だろうと思っている。現場でやっていくことによって向こうに安心してもらって、そういう感じなら一緒にこういうことができるかも、という期待を少しずつ持ってもらう。そこが「お祭りに参加しよう」というだけでは超えられないところだろうと思っている。
- 障がいのある方自体がすごく変わるということは、実はそれほどない。何といったらいいか、生活レベルでは単純に時間をかけていっているので、最初はすごく来ることが苦手で、なかなか落ち着かなかった人が、普通に笑顔が多くなって落ち着いていくということはよくある。
- 単純に、みんなが個性を尊重する時間を24時間持ち続けるような支援ができれば、この間までほかの事業所では暴れまくって居られなかったような人が、うちに来て居られるようになったという話は本当に何例もある。

4. 問題点・課題

(1) 文化施設スタッフの仕事の仕方

既存の劇場・ホールでの仕事分担は、施設貸出・管理、舞台技術、事業企画・制作、票券、広報、総務・経理などが基本だろう。そうした文化施設が実際にコーディネートを行おうとする場合、身近にアサダさんのような立ち位置のコーディネーターがいれば業務委託などが成立するかもしれない。しかし、アサダさんのように市民との日常的な関係を重視する場合、やはり施設スタッフがそうしたコーディネートを行うべきだと考えられる。

ところが、現在そのような役割のスタッフが文化施設に置かれていることは稀で、気がついたスタッフが自らその役割を担っている場合もある。問題は、その行為が仕事として位置づけられていなかったり、その人が特別だからと理解されていたりすることである。アサダさんは、具体例を紹介して、このような仕事について仕組化の必要性を指摘している。

【インタビュー調査の発言から】

- 思い浮かぶのは、以前とある地域の文化振興財団で働いていた友人。職場ではホールのコンテンツをつくるというよりは、ホールの外に出て日常的に地域の人と付き合っていた。ホールの主催としてミュージシャンが街なかの各所で演奏するイベントや地域にある昆虫館と連携して、そこのスズムシをまちなかに点在させて、サウンドインスタレーションのようにスズムシが各地で鳴くのを聴きながら街を歩くという、実に素晴らしい企画などをやっていた。
- 彼自身は界隈では有名になったが、しかし、そういうスタッフは最後に辞める。ずっといると物足りなくなる。しかし辞めてしまったときに、結局それが答えになってしまう。要はそういう活動をその文化ホールの仕事にするという認められ方が、ここで途絶えてしまう。「あの人は特別だった」で終わってしまう。やはりホールのような物理的な空間にいる人が、目に見える形で街の人を巻き込みながらプロパーとして居続けるという状態をつくるのが、おそらく地域からは一番分かりやすい。
- おそらく彼は、パーソナルな部分を出して仕事していたのだろう。いい意味ではそこまでやって初めて実現できたことでもあるし、その点とても尊敬しているが、強いて課題を言えば「それは彼でないと引き継げない」と言われてしまうようなことだと思う。彼のような仕事の仕方を、個人の取り組みとして終わらせるのではなく、どこかで仕組みとしてみてはと思うが、一方で、仕組みにしたらしたでマストな業務になり「それをやろう！」と内発的に思えないかもしれない。だから、その塩梅は難しい。また、この問題は自分にとってもまったく他人事ではない。

(2)コロナ禍による、熟議の場の減少と効率化への危惧

「208 南森町」や「住み開きアートプロジェクト」で生まれた対話や熟議の場づくりは、各地の現場でも引き継がれ、市民参加型のプログラムにおいては市民の意見をすくい取る重要な装置となっていた。しかし、コロナ禍によって、大人数で集うことはおろか、対面で会話することすら憚られる状況になった。その代替手段としてのオンライン化は遠方に住んでいる人や、持病などを理由に参加できない人を対象としたサポートとしての効果的な活用も見られる一方で、アサダさんは業務効率化を優先していくことに危惧を示している。そして、今後、一見無駄そうに思われることを話す場を、わざわざつくることもアートコーディネーターの仕事の一つになるのではないかと指摘する。

【インタビュー調査の発言から】

- 無駄にずっと話していろいろ議論する時間や話す時間が、おそらく世の中ではこれからはどんどん減っていくと思う。オンラインになるとノイズ（一見無駄な話）が圧倒的に減る。長く話す中でやっと「実は」と悩みを言ってくれる。今後、そこに行く手前で「じゃあ、もう用件は済んだから」と話しが終わってしまうようになっていくと、結構きついなと思う。
- アートプロジェクトでは、「私たちは何で一緒にこんなことをやったのだろうね」というような不思議な体験をする時間があったからこそ、その後に一緒に自分の街について語ることができたり、自分の家族について語ることができたりする。自分の日常生活にこの経験を落とし込んで初めて、一人ひとりが成長していくことがあると思う。
- 無駄なことや、一見無駄そうなことなどをきちんと話すような考える場をしつらえていくこと自体が、一つのアートコーディネーター的な仕事になってくるのかなと思う。

(3) 分野横断できる「通訳者」の必要性

アサダさんはこれまで多くの仕事で行政担当者とともに事業運営に取り組んできた。しかし、その中で行政が求めているものが「もっとわかりやすいアートイベント」であることを課題に感じてきたと言う。「わかりにくい」ことをそのまま受け入れるには、経験と見識の裏打ちが必要だが、分業に基づく行政システムの中では、個々のパフォーマンスと理解力に個人差が大きいことも課題の一つだと指摘する。

アートでも福祉でもあるような活動について、それが文化振興で行った事業の場合、結果的に福祉につながった、福祉的な意味もあったと行政職員が理解できるようになれば良い、というのがアサダさんの考えである。安易な「わかりやすさ」に落とし込まないことで解決に近づけるようなアプローチも必要だろう。

【インタビュー調査の発言から】

- アートプロジェクトとしてやっていても、「アサダさんたちがやっていることって、福祉じゃないですかね」という話になる。私の中では「いや、福祉ではなくて、これはアートなのです」ということを戦略的に言うこともできるが、「まあ、福祉でもありますよね」というのが正直なところ。きちんと考えてコーディネーションをしたときには、福祉とアートが溶けるはず。
- 本当にコーディネーションできていたら、どちらのものということはできないのではないか。まだ取り出せるのなら、むしろ混ざっていないということだろうと思うところがある。
- 分野・ジャンル・カテゴリーで分けるという思考から抜け出せない限り最終的には難しい。
- 例えば、役所の人たちが、きちんと文化振興課としての立場でいつつ、これは文化振興をやった結果として福祉やまちづくりのようなことにつながったと、活動自体にいろいろな意味があることまで含めて理解するようなことになっていけばよい。

5. コーディネーター推進の方向性

アサダさんの事例調査から、地域の劇場やホールなどが、時間をかけて地域の課題に向き合っていく姿勢を持つことが、今後の地域における文化拠点にとって極めて重要な役割であることがわかってきた。そのために必要と考えられるのは、(1) 相談を事業化すること、(2) 文化施設にコーディネーターの仕事を位置づけ連携を模索すること、(3) 結果だけでなくプロセスを評価することの 3 点である。

*19：大阪市が中心となって設立された芸術創造活動支援事業実行委員会が開設。芸術系 NPO の立ち上げを考えている方や市民に対する相談や情報提供のほか、NPO 運営やイベント運営のノウハウなど、広く情報を提供。2012 年 3 月に終了

(1) 相談を事業化する―生活と地続きの施設として、まず地域の話しを聞く

アサダさんは、自身の経験から相談の大切さについて、相談者にとっては人生の悩みのような奥深い部分につながっている、と指摘する。文化拠点が地域のコーディネーター的な役割を担うために、まずは、自ら市民の聞き手となる相談事業をスタートさせることを提案している。

【インタビュー調査の発言から】

- 築港 ARC の現場でも、相談窓口を設けて相談事業に力を入れていた。築港 ARC が終わった後、それなりに評価され、継続事業としてアートインフォメーション＆サポートセンター中之島4117 (*19) というスペースができた。
- 相談というのは結構楽しい。私はコーディネーター的に築港や中之島でやっていたときに、相談の日に「憂鬱だな」と思ったことはなかった。結構自分も楽しんでやっていた。「そんな悩みがあるのか」「そんな実存があるのか」と、「なるほど」と思ってやっていた。
- 福祉の現場におけるコーディネーター・相談支援専門員の役割はすごく大きい。彼らは基本ずっと伴走している。「ケース」というが、その人のケースをずっと受け持っていてくれるから、例えば、3年間この事業所にいたが、次はこちらで就労するとなったときに、ずっと追い掛けてくれる。
- そこでも相談員として定期的にいろいろなタイプの相談に乗っていた。「こういう所で働きたい」「作品を発表したいけれども、ギャラリーは？」というようなレベルの相談でも、突っ込んで話を聞いていくと、ほぼ人生相談になる。相談に来た案件よりもそちらのほうが大事ではないかというような話や、「実はお母さんが病気で」というような話になることもある。自分が何に悩んでいるのかが分からない状態で話をはじめて結果的に「入り口はそこではなかった」という風に一緒に考えていくことが一定数ある。文化の部門の相談と言っても、それほどライトではなく、人によっては人生に関わる相談になる。
- 文化施設に相談できる人がいるというのは、とても豊かな話だと思う。

(2) 文化施設にコーディネーターの仕事を位置づけ連携を模索する

アーティストとコーディネーターの仕事を往復することがアサダさんの仕事の特性の一つで、特に行政と事業を行う場合はプログラムオフィサー的なコーディネーターとして、地域や市民との橋渡し、協働をしてきた。

文化施設が、具体的に地域課題にアプローチしていくためには、このようなコーディネーターを配置し、他のジャンルのコーディネート職と連携することも求められる。福祉の場合は、細分化している地域福祉に横串を刺す「地域ケア会議」があるが、文化施設側にコーディネーター職が置かれている場合、このような会議の場にも接点を持ち、文化や芸術が福祉に対して果たせる役割を探していく姿勢が必要だと考えられる。そうした取り組みを福祉に限ることなく、相互連携により文化行政の効果が生まれそうな他分野の現状やシステムをよく研究し、そこに文化芸術が果たせそうな役割を見いだし、協働を打診してみることから始めるのもひとつの方法ではないだろうか。

【インタビュー調査の発言から】

- プログラムオフィサー的なアートコーディネーターが、住民だとか、いろいろな立場の人たちの意見を足し算的に自分の中に眠らせながら、「だからこういう意見も出るよね」ということをきちんと通訳できる立場の人とすると、アートの専門性や知識だけではなくて、コミュニケーションの話になってくる。
- 東京芸術劇場の社会共生課という所が、幾つかの社会共生プロジェクトをすでに動かしていて、私は３人のア

「品川区立障害者総合支援
施設ぐるっぽ」での様子

ドバイザー的な委員の一人として協力している。具体的には障がい福祉の現場でダンスのワークショップを行うチームや、視覚障がいや聴覚障がいの方の鑑賞教育のプログラムがある。スタッフは、もともと舞台やコンサートの企画やマネジメントをしている人たちが、そういった部門を兼務している。

- 今、学生の人たちは当然コロナの経験や、社会的な混沌とした状態の課題をたくさん感じていると思う。劇場に勤めることや、これからアートの現場で働く人たちが、アートの仕事を「演劇が好きだから」ということ、それもすごく大事だと思うが、と同時に、世の中で、自分が、仮に劇場に入ったらどういう役割を担えるだろうかという、もう少し大きなところで考えられるといい。

(3) 結果だけでなくプロセスを評価する

また、劇場・ホール等が地域の課題と向き合うプログラムを実施する際に、アウトプットとなる公演の内容や成果で評価するのではなく、あくまでそのプロセスにおいて、どのようなやりとりや交流があったかを検証し正しい評価ポイントを見極める必要があると、アサダさんは指摘する。

【インタビュー調査の発言から】

- ある種社会的な要請もあって行う社会共生や社会包摂事業に対する評価軸は、芸術のアウトプットで規定されているものに限らないところまで掘り下げてつくらないと無理だと思う。
- なぜなら、結果的に公演になっていることは、公演の評判や集客数などで評価されるということになる。そのほうがむしろ危ない。
- その事業の過程で、参加者から進学の相談を受けるようなことがあった場合、一見「それはアートの専門性に関係ありますか」と言われそうな話だが、そのプロセスで担当者が信頼されること自体が、むしろ社会共生といえる。
- 文化からアプローチして、一人ひとりの市民の相談に乗れるような信頼関係が構築されていくということがきちんとつながっているところまで掘り下げて評価ポイントをつくる必要がある。そうでないと、事業の担当者が報われないし、社会共生事業自体もよくならず、形だけで終わってしまう。
- アートコーディネーションは、よりソーシャルワークに近くなっていく。そこまで含めて、評価軸をつくる評価委員の方も考えていく必要がある。それとセットで現場も変わっていくというようなことが必要だと思う。